



情報化社会の中で

向 井 浩*

近年、パーソナルコンピュータ（PC）の前にいることが多くなったと感じる人は多いのではないだろうか。インターネットの普及により、様々な情報をPCまたはスマートフォンなどの情報端末から得ることが多くなっている。職場、家庭、日常の様々な場面において、PCまたは情報端末はなくてはならないものになっている。

そのような現状の中、今年8月に研究室で使用している仕事用のデスクトップ型PCが壊れてしまった。数ヶ月前から、突然シャットダウンしたり、起動に失敗したりして調子が悪かったが、騙し騙し使用してきた末に、遂に全く起動しなくなった。PC部品を買い集めて自分で組み立てた自作PCで、ハードディスクドライブ（HDD）が壊れる度にHDDを交換しながら、10年間使用してきた思い出のあるパソコンであった。PCのオペレーションシステム（OS）は、サポートの切れたMicrosoft Windows XPであったため、そろそろ本体ごとの更新を考慮しており、必要なパーツも買い揃えてあったが、更新作業の煩わしさから、先延ばしにしていたところであった。動かなくなったことで、ようやく更新作業をする決心がついた。丁度、授業は夏期休業中であったため、これを幸いに連続の3日間程を掛けて、PCの更新作業を行った。最初の1日は、ハードウェアの組み立てで終了した。2日目にMicrosoft Windows 7をインストールした後、インターネット接続の設定、セキュリティソフトの導入、データの移行等、基本的なソフトウェアとデータの導入を終えた。3日目にこれまで使用していたアプリケーションソフトをインストールして、ほぼ元の使用環境に戻すことができた。PCの頭脳とも言える中央処理装置（CPU）をより高性能なもの更新し、外部記憶装置をHDDからソリッドステートドライブ（SSD）へ変更し、OSも32 bit版から64 bit版にしたことにより、動作速度が格段に向上すると同時に、安定した動作で快適に安心して使えるようになった。つくづく更新して良かったと感じているところである。

こうしたPCに関する自分の体験を通して感じたことは、PCがもはや自分の体の一部のようになっているということであった。第二の脳や目と言っても良いほどに、思考作業や情報収集をする上で、PCがなくてはならないものになっている。工作上必要な情報は、PCのHDDにしまわれており、それにアクセスできないことで、手も足もでない状況に陥った。事ほど左様に、PCの存在は不可欠なものになっていることに気づかされた。これが、PCの故障により、他の仕事を中断してまでも、PCを新しくする作業に掛かりきりになった理由でもある。

PCの故障は、そこに保存してあったデータを利用できなくなることで窮地を招いたが、最近は、

*京都教育大学教授、公益財団法人海洋化学研究所理事

データやソフトウェアなどを自分の PC に入れず、インターネット上に置いておき、そこに PC 等の情報端末からアクセスすることで、従来の PC と同じ働きをさせるクラウドコンピューティング（クラウド）という方式が普及してきているようである。この方式を用いれば、他のインターネット接続可能な PC に切り替えるだけで、同じ環境で仕事が継続できる利点がある。

実は筆者も、このクラウドに類することを一部、利用している。

例えば、授業で用いる Microsoft PowerPoint のスライドである。以前は PowerPoint ファイルをノート型 PC またはユニバーサルシリアルバス（USB）メモリに入れて講義室に持ち込んでいた。しかし最近では、研究室ホームページ（HP）に Adobe PDF ファイルに変換して貼り付けておき、講義室に据え置かれた PC から HP にアクセスして閲覧し、それを提示するようになった。

また、大学の情報処理センターが提供する Web 情報共有サービスを授業で利用している。これは、大学が提供するインターネット上のフォルダである。このフォルダにファイルを置いておき、アクセスが許可された利用者がそのファイルを閲覧またはダウンロードして共有するサービスである。利用者によるファイルのアップロードも可能である。このサービスを用いることで、授業で用いるプリントを印刷して、受講者に配布することが不要となった。また、実験データなどをファイルの形でアップロードさせることで、データの統合や加工が容易になった。このように、このサービスを授業で用いる利点は大きい。また家庭や旅先でも、インターネット接続環境さえあればフォルダにアクセスできるので、場所を選ばずに必要なファイルを用いて作業することができ、大変重宝している。

現在、インターネット環境の整備とその広がりにより、インターネット経由で様々な情報に接することができるようになった。以前であれば、専門書に当たらなければならなかったことも、自宅の PC から検索して調べることが可能である。例えば、二、三十年前は、論文の検索は図書館に行き、論文情報を集約した冊子 Chemical Abstract を捲って探したが、これも研究室のパソコンから瞬時に検索できる状況になった。しかも、こうした利便性を、情報機器とアクセス権を持つ誰もが享受できる点も、これまでにない新しい点であろう。これは専門家に限らず、一般の人達にとっても、同様な状況にある。このように、簡単に誰でもが専門的な情報に接することができるようになってきているように思われる。これが、科学の裾野を広げる後押しになることを期待する。

現在、海洋化学研究所の HP には、各種講演会の目録、学術賞受賞者の一覧、機関誌「海洋化学研究」の目次と内容が第 1 回から現在まで記録されている。これは一種のデータベースであり、とても価値があることと思っている。

海洋化学研究所は、本年 9 月 1 日より、一般財団法人から京都府所管の公益法人に移行した。関係者として、ご尽力いただいた皆様に深く感謝する次第である。

公益法人化に伴い、公益性のある会員サービスの充実化が期待される場所である。会員サービスの内、情報発信力の強化は、誰もが簡単に様々な情報にアクセスできるようになったインターネット時代には、その重要度がますます高まっていると思われる。インターネットを用いた情報発信は、会員、専門家に限らず、一般の人々まで広く到達可能である。インターネットを、海洋化学の認知を広げるツールとして有効に活用できれば、大変素晴らしいことと思う。